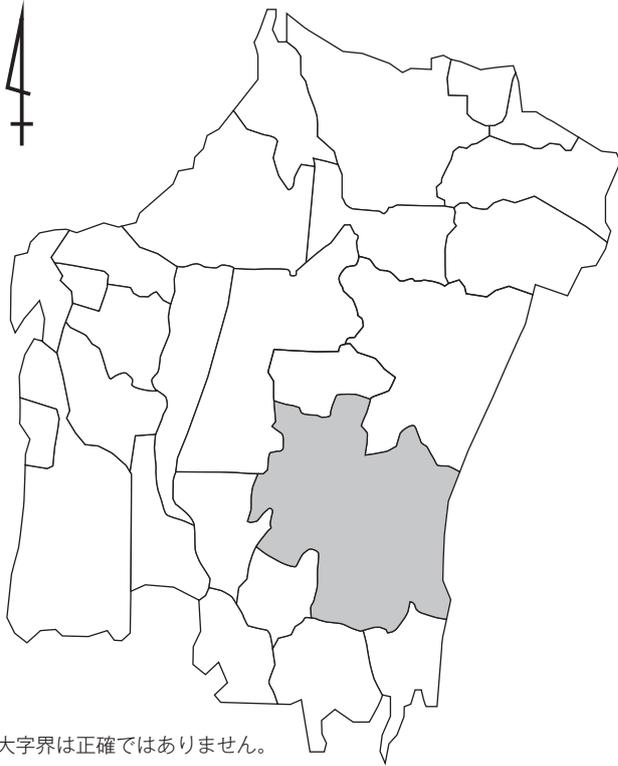


郷土かみのかわの歴史・文化財

上三川の地域と歴史 上三川

大字上三川は、町の南東部に位置し、南北に延びる岡本・田原台地と鬼怒川低地からなります。地区の東側を雀川、中央部を江川、西側を磯川が南流しています。現在の町名にもなっている「上三川」という地名の由来には諸説ありますが、古くは平安時代

に編纂された『和名抄』のなかに垣間見ることできます。古代の河内郡内には10の郷があり、そのひとつである「三川郷」に由来するといわれます。三川郷は、田川・無名瀬川・鬼怒川あるいは江川によって形成された郷であったと推測されます。その後、三



※大字界は正確ではありません。

川郷は、上三川・中三川・下三川に別れ、江戸時代には上三川は上三川村と呼ばれていました。元禄郷帳によれば、上三川村という名は、上三川中町・上三川下町・上三川大町・東館村の総称とされます。以降、明治22年(1889)の町村制施行を経て、昭和30年に本郷村・明治村と合併して上三川町となるまで上三川村の地名が残ります。

さて、大字上三川は、古来より有力者の住まう土地でした。古墳時代には、愛宕塚古墳(字愛宕)やかぶと塚古墳(字富士山)といった大谷石に似た凝灰岩質の一枚岩を使用した横穴式石室を持つ古墳が作られました。近年、これらの石室をもつ古墳が栃木県南部に集中して分布していることから、下野の首長連合の墓ではないかと研究者の間で注目を集めています。

また、ここ大字上三川の北部には上三川城跡があります。現在は、東西約90m、南北約100mに及ぶ範囲に

土塁と堀を残すのみですが、平成8年に都市公園として整備され、近隣住民の憩いの場となっています。建長元年(1249)、多功城とともに宇都宮城南方の守りの要として築城されました。初代城主は、宇都宮氏5代当主頼綱の次男・横田頼業です。歴代の城主は、南北朝動乱期の戦い(1339)や裳原の合戦(1380)などで活躍しまし

た。慶長2年(1597)、14代城主・今泉高光の時に真岡城主・芳賀高武に攻められて落城するまでの348年間に渡り、上三川一帯を治めていました。上三川城跡の北側にある善心寺は横田氏の菩提寺、長泉寺は今泉氏の菩提寺となっています。

現在も大字上三川は、市街地として町の中心的役割を担っています。



公園として整備される以前の上三川城跡の全景